

金賞 小学生の部

地下鉄の優先席

伊豆の国市立長岡北小学校 六年

濱村 菜々子

夏休み、私はお父さんに会うために、シンガポールへ行きました。日本で出かける時は、車をよく使いますが、シンガポールでは、日頃あまり乗らない、地下鉄を使いました。地下鉄には、遠くからでもよく目立つ、濃い赤紫色の席がありました。それは、日本の優先席と同じ、お年寄りや妊婦さん、ケガをした人や小さな子供が優先して座ることができる席でした。そして、その席の後ろには英語で、「Show me take care」と書いてあり、お父さんに意味を聞くと、「あなたの心遣いを見せてという意味だよ。」と教えてくれました。私は、(日本と同じなんだな。)と思いました。その後、若い人が何も言わずに席をゆずったり、声をかけて席をゆずる人を見かけました。

別の日家族で地下鉄に乗っていると、おじいさんが乗ってきました。私はお父さんに、「席をゆずってあげたら？」

と言われました。でも、(言葉が通じなかったらどうしよう、ゆずっても座ってくれなかったらどうしよう。)と思い、すぐにゆずることはできませんでした。でも、しばらくしても席が空かないので、勇気を出してゆずろうと思いました。ドキドキしたけど、おじいさんの肩をたたいて、空けた席を指さしました。すると、おじいさんは、

「Thank you」

と言って、ニコニコしながらゆずった席に座ってくれました。ほっとしたおじいさんの顔を見て、私はうれしい気持ちになりました。また別の日に地下鉄に乗っていると、弟に席をゆずってくれた優しいおじいさんに出会いました。その日の弟は、たくさん歩いて疲れていたので、弟が座ることができてよかったです。と思いました。

私は国がちがっても、言葉がちがっても、思いやりの気持ちや、人が困っていたら助けようという気持ちは、皆一緒なんだな、と思いました。このできごとがあつてから、私は優先席には座らないようにしました。また、自分が席に座るときは、周りに困っている人がいないかを意識するようになりました。

た。

自分が少しがまんすると、他の人はうれしい気持ちになったり、助かったりします。自分のことばかり考えず、ちょっとだけ周りの人の気持ちを思って、自分にできることがないか…と考えられるようになります。また、自分が相手のことを思っても、行動しないと、その思いは、相手には伝わりません。勇気を出して、思ったことを行動に移せるようにしたいです。人に親切にすると、お互いにうれしい気持ちになります。シンガポールでのできごとを忘れずに、優しい心で毎日を過ごしていきたいです。

親切だと思っていたのに…

静岡市立服織小学校 四年

福本 環

私が三年生の時の話です。大の親友が右手を骨せつしてしまいました。手が不自由だと困ると思いついてあげようと心に決めました。その気持ちを親友に伝えたら、

「本当に!?じゃあ手伝ってもらおうかな。ありがとう。」とよろ

こんでくれたので私もうれしい気持ちになりました。席も近かったので色々気にかけてあげると、親友からも、「ありがとう。」と言われてうれしいし、先生にも、「えらいね。」とほめられるので、毎日毎日楽しくつづけていました。それからしばらくして親友の白くかたい右手が包帯だけになり、少しなおったのかと安心しました。親友も後少しでなおるみたいでうれしそうでした。ある時、給食当番だった親友に、

「まだやらない方がいいよ。代わりにやってあげる。」と言ったら、悲しそうな顔をうかべて、「ありがとう。」と小声でつぶやき、席についてしまいました。親友が何で悲しそうな顔をしたのか、心のおくにひっかかったまま一日がすぎてしまいました。帰り道トボトボ歩きながら、その事を考えていました。私はいい事をしてあげているのに、なぜあんなに悲しい顔をしていたのか不思議でした。これまであの子とケンカもしたこともないのに胸がキュンとせつなかつたです。何でそのことをきけなかったのか、どんどん自分をおいつめてしまい、帰り道が長く感じてしまいました。次の日、私は、昨日の事をぜったいに聞こうと心にきめました。学校について、親友に話しかけると、「きのおうはごめんね。ちょっと手がなおってきて、病院の先生に少しづつ動かしていいよと言われたから、自分でしようせんしてみたかったの。」と悲しい顔をした理由を話してくれました。

私は、そのことをその時にいつてくれればよかったのと思いました。親友となか直りができたのですが、今度は、自分が右手を骨せつしてしまいました。友達に色々手伝ってもらって助かりました。でも何でもかんでも友達に全部やってもらう事に何かちよつとちがうなとへんな気持ちになりました。自分でできるのにやってもらっていいのかなと気づいた時、私の大の親友が骨せつした時の気持ちは、私の今感じているこういうことを伝えたかったのかと、はつとしました。親せつだと思つてやっていることも、やりすぎてしまうと、相手の心を不ゆかいな気持ちにさせてしまうんだと思いました。これからは、自分の勝手な思いこみで行動するのではなく相手にどうしたらいいのか聞いてから、手伝つてあげる方が良くないかと思ひました。相手がか心から「ありがとう」と思える、親せつができるようにしたいです。

小さな親切はやさしさいっぱい

浜松市立伊佐見小学校 三年

水野 瑛仁

「みんなにやさしく、親切にすれば、お友だちがいっぱいできるよ。」

お母さんがいつも、ぼくに言う。親切つて、どうすればいいのか。こまつている人を助けること？

ぼくが、スーパーマーケットへ買い物に行った時、こしが曲がつて、下を見ているおばあちゃんがいた。ぼくよりも小さい小さいおばあちゃん。買い物カートをおして、一人で買い物をしているけれど、手で持つ所に頭がぶつかつてしまひそう。ぼくは、びっくりして、心配で、お母さんをさがして言った。

「お母さん、ぼくよりも小さいおばあちゃんが、お買い物をしている。大じょうぶかな。」

お母さんが答えた。

「おばあちゃん、一生けんめいにお買い物をしているね。大じょうぶだよ。おばあちゃんが、ゆっくり安全にお買い物ができる

ように、お店の中を、走っちゃだめだよ。おばあちゃんがこまっ
ていたら、お手つだいをしようね。」

お母さんも、心配そうにおばあちゃんを見ていた。小さいおば
あちゃんは、ゆっくりゆっくり買物をしていた。

ぼくは、家へ帰ってきてからも、考えていた。

「おばあちゃん、大じょうぶ？」

「おばあちゃん、お手つだいの事ある？」

「おばあちゃん、ぼくが荷物をもつよ。」

って、ちよつとゆう気を出して、話しかければよかったかもし
れない……って。後かいた。

「親切 ってむずかしい。

うれしかったこともあった。ぼくが、水泳教室から帰ろうと
していたら、ようち園ぐらいの男の子が、なっていた。

「どうしたの？」

と聞いてみたら、

「ママがいない……。いつもなら、ここでママがまっているのに、
いない……。」

なみだがボロボロこぼれていた。

「大じょうぶだよ。すぐにママが来るよ。一しよにまっていよ
う。」

ぼくは、自ぜんに言っていた。え顔になってほしかった。二十

分間位まっていたら、男の子のママが大急ぎで走って来た。男
の子の顔が、パツと明るくなった。え顔になった。ぼくは、とっ
てもとつても、うれしかった。自分のことのようにうれしかっ
た。

ぼくは、とつてもやさしい気もち、人を思いやる気もちが、親
切 だと思う。親切 って、すごく大切なこと。そして、ゆ
う気もちいること。

ちよつとゆう気を出して、小さな親切 を、いっぱいいっ
ぱいできるように、ぼくもがんばろう。そして、小さな親切 が、
いっぱいいっぱいあふれて、世界中のみんなが、え顔でう
れしい気もちになれるといいな。



金賞 中学生の部

親切な道具

長泉町立長泉中学校 一年

鵜澤 柚季

コツコツ、コツコツ、と杖をついて私とは反対側の歩道を歩いている人がある。小学生の時から下校中にとときき見かけている。その人は、三十代くらいの女性で、目が見えていない。

小学五年生の時だった。私がいつものように友達と下校中に信号待ちをしていると、その女性が私達の方へ歩いてきた。私達は端の方へよったが、近くにいた男の子達は女性に気づかず話していた。私は、「危い」と声をかけようと思ったが、その男の子達は私よりも年上の六年生で、注意をする勇気がなかった。私が迷っているうちに、案の定、女性の杖に男の子がひっかかり、転びそうになって、最後には女性とぶつかった。直後に信号は青に変わり男の子達は行ってしまったが、女性はとても申し訳なさそうに、私とは反対方向に歩いていった。私

の心は、けむりがかかったようにモヤモヤでいっぱいになった。

「見えない。」とは、どのような気持ちなのだろうか。不安なのだろうか。悲しいのだろうか。それとも、怖いのだろうか。

私は、小学四年生の時に、アイマスクをして、目が不自由な人の疑似体験をした。一歩歩くだけでも目の前に何があるか分からなくて、とても怖かった。そのことを私は思い出して、隣にいた友達に言った。

「さっきの目が不自由な人、かわいそうだったよね。」

すると、友達は、私が考えたこともなかったことを言った。

「でも、すごいよね。目は不自由だけど、私達と同じように歩いているって。」

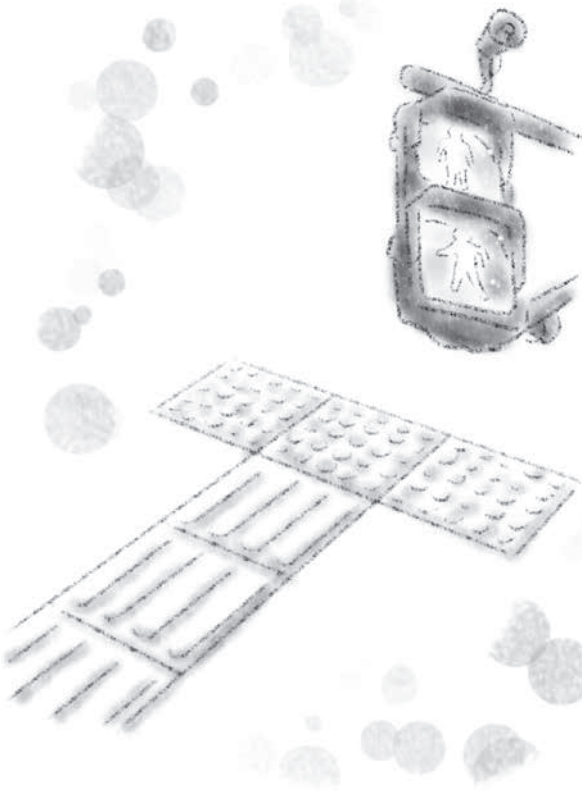
私はその一言で、目が不自由な人に対する見方が変わった。「かわいそうな人」ではなく「すごい人」。

私はその後も何度かその女性を見かけた。すると、ある日、点字ブロックの上にあたっていた人が女性に気づいて、点字ブロックをあけた。そして、女性は点字ブロックに気づいて止まることができた。この、ただ一歩動くだけの「小さな親切」が、誰かを助けている、そう思うと私は、「親切」が、どれだけ大切かが分かったような気がした。

この世界には「親切な道具」が、たくさんある。点字ブロック、音の鳴る信号、スロープや、車いす用のトイレ。でも、そ

の「親切な道具」を、親切のために使わないと、本来の目的を見失ってしまう。この世界にある「親切な道具」が全て「親切」のために使われたら、「小さな親切」は、「大きな親切」に変わり、その「大きな親切」は、「みんなが明るくなる世界」へとつながっていくだろう。

コツコツ、コツコツ。今日も私はあの女性を見かける。コツコツ、コツコツ。あの杖の音は、力強く、一歩一歩進んで、未来へと続いている音に、私には聞こえる。



僕を救った一言

静岡大学教育学部附属島田中学校 三年

久保田 夏央

僕には小さい頃から吃音があります。小さい頃は言葉の始めの文字を何度も繰り返してしまい、小学校に上がったからは緊張すると言葉がつまってすら話せないのです。小さい頃から「しゃべり方が変」と言われたり、真似をされたりしてかわれていました。特に小学校後半からは、自分でも恥ずかしいという気持ちが大きくなり、小さい頃は沢山した発表も避けるようになっていきました。

そんな僕は、今通っている中学校を受験しました。初めての面接は緊張しましたが、何とか終えることができました。しかし受験後その緊張からか以前より吃音が激しくなり、すっかり自信をなくしてしまいました。

そのまま僕は中学校に入学しました。入学式、同級生一人一人全員を目の当たりにした途端、うまく話せない所を初めて見られることへの不安が膨らみ、中学校でもあまり人前で話せずに過ごすのかという恐ろしさが一気に僕を襲いました。

翌日、自己紹介で僕はやはりうまく話せませんでした。皆の視線が痛く感じ、早く座ってしまいたいと思いました。紹介が終わり休み時間になると、予想通り一人の男子に声を掛けられました。また馬鹿にされるのかな？真似されるのかな？と思うと同時に今までからかわれた記憶が頭をよぎり体が強ばるのを感じました。しかしその子が言った言葉は予想とは違いました。その子は僕に、

「人前で話すとなつちやうの？」

と聞いてくれました。僕は思い切って、

「小さい頃からずっと吃音で、緊張するとうなつちやうんだ。」

と言いました。するとその子は、

「僕も吃音ではないけれど緊張するとうまく話せないんだ。お互い頑張ろうね。」

と言いました。その一言は、僕の心の中に長い間居座っていた黒い塊をそっと、そして確かにどけてくれたような気がしました。そして他にも誰一人、僕をからかう人はいませんでした。僕だけではない、みんな触れてほしくない悩みがあるのかも知れない、と気づきました。

それから僕は思い切って、「吃音がありますですが気にしないで下さい」と自己紹介カードに書きました。少しずつ発表にも挑

戦するようになり、後期には学級総務に、二年生では学年総務に立候補し活動することができました。あの時くれた何気ない一言が、僕の中で学校生活を何倍も楽しいものにしてくれました。僕の吃音はまだ治っていませんが、彼の言葉で僕はとても救われました。

僕も、あの時もらった温かい優しさを覚えていようと思いません。そして悩んでいる人、困っている人と同じ目線で、自然に、そっと手を差し伸べられる、そんな人になりたいと強く思っています。

一度あっただけの人

富士市立吉原第一中学校 三年

渡邊 ひより

私は、いつも、親切にしないではいけない場面でもどうしても考えてしまうことがある。それは、「車いすの方がいる。手助けをしなくちゃ。でも、この親切がその人から、できることを奪ってしまうのかな。」と、思ってしまうことだ。本当に困っているのなら、私も手助けを確実にすることができる。こう思

うようになったのは、少し前の話だ。

中一のと看、祖母がけがをして、入院した。そのときの私は、何も思わず、人助けができていたと思う。

ある日、いつものように祖母の病室へ向かっていると、女の人が転んでいた。私は、そこへ走っていた。

「大丈夫ですか？立てますか？一緒に病室まで送りましょうか。」

「いえ、大丈夫です。立てますから。」

「でも、けがしてるじゃないですか。」

「大丈夫っていつてるじゃないですか。私は、まだ、歩けるんです。私から、できることを奪わないで。」

私は、そのとき初めて知った。人助けができることを奪うことを。私は、彼女に謝ることしかできなかった。そうしたら、彼女は、私にその理由を話してくれた。

彼女は、がんだと私に話した。そして、一日、一日、何かを失うような気がして怖いと言った。一年前、大好きなお肉が食べれなくなった。一カ月前、何かにつかまらなると転ぶようになった。私に、いろんなことを言ってくれた。私より、はるかに人生の先輩だった彼女は、私に伝えてくれた。

「親切というのは、プラスのことだけじゃないんだよ。人からできることを奪うというのものもあるんだ。私は、手助けされる

と、今日はこれを失ったんだって思っちゃう。私も、がんになつて気付いたよ。私だけかもしれないけど。」

私は、彼女が教えてくれたことがとても大切なことだと感じた。自分がされた側のときのことをよく考えたことがなかった。本当に必要な親切がある一方、人からできることを奪う親切。人に優しくする。親切な心を持つ。小学校から習ってきたあたり前のことが、彼女の言葉でくずれた気がした。

今、一度しか会っていないが、彼女が私に教えてくれたことはすばらしいことだと思う。親切というのは、両方の顔をもつことだと知れて良かった。私は、一人の人間として、人を守れる存在でいたいと思う。

中三になった私は、彼女の言葉を忘れず、相手の気持ちをしっかり考えたい。そして、それができたら、すごくいいものを得られると思う。



金賞

銀賞 小学生の部

ちいさなしんせつ

湖西市立東小学校 一年

松井 琴音

わたしは、はじめ、どんなことがしんせつなのか、よくわかりませんでした。あるひ、いもうとが、おもちゃがとれなくてなっていました。おかあさんがちかくにいなかったたので、わたしがとってあげました。

「ありがとう。」

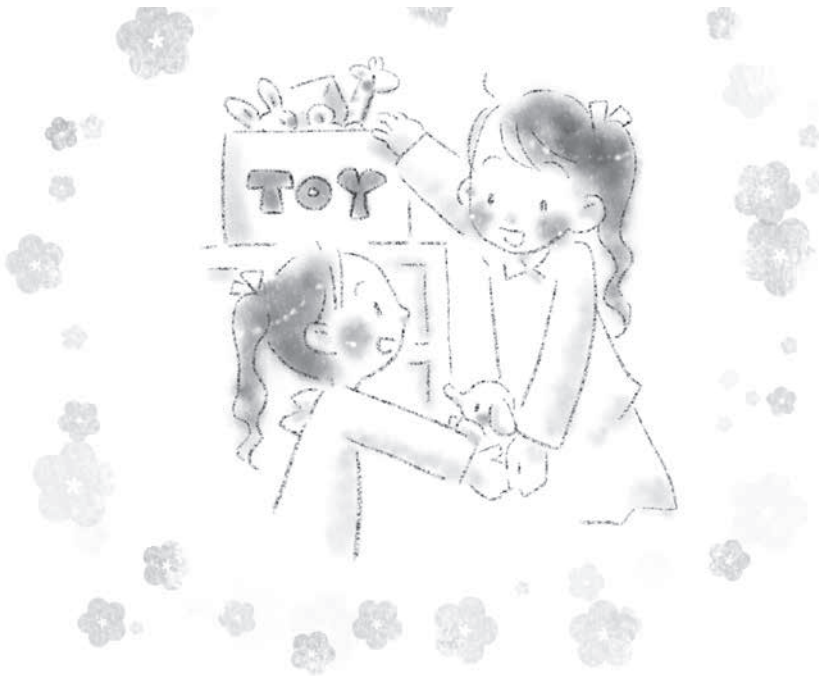
と、いってくれました。わたしは、うれしくなりました。

おかあさんにはなしたら、

「めずらしくしんせつだね。えらかったね。」

と、いわれました。すこしびつくりしました。しんせつは、もつとすごいことをしないといけないとおもっていたからです。でも、かんたんなことでも、しんせつになることがわかりました。だいじなのはたすけてあげたいというきもちだとわかりまし

た。
わたしは、いろんなひとに、しんせつにできるようなひとになりたくです。



小さな親切とは…

掛川市立中小学校 六年

梶山 さくら

私が小さな親切について書こうと思ったのは、小さな親切って何だろうかと疑問に思ったからです。私なりに、親切って何だろうと考えたとき、親切をする側は、相手の事を思い、優しさや思いやりを持って接する事、困っている人がいたら、自然と手を差し伸べて助ける事が出来る事かなと私は、思いました。親切を受ける側は、また、親切をする側と受け取り方がちがうのではないかと思いました。

私の周りは、優しい友達がたくさんいます。私の友達は、つらい事があった時、声を掛けてくれて話を聞いてくれます。

「何かあったら私に言ってね。」

と声をかけてくれる友達の優しさにもいつも助けられます。

給食の時、私は、委員会で教室にいませんでした。放送室に着いてから、私の給食の用意をしてもらうように友達にたのむのを忘れてしまいがっかりしていたけど、教室にもどったら友達か机の上の給食の支度を全てやってくれてありました。私は、

自分の机の上を見たしゅん間、すぐうれしかったです。

外に行く時、ぼうしを忘れて行ってしまった時、気がついた友達がだまって持ってきてくれてそっと渡してくれました。さりげなく渡してくれたことが実は相手には感謝されるのではないかと思います。「ぼうしを持ってきてあげたよ。」などと言っていました。がちですが、そうするとかえってありがたいと言う気持ちも少しありますが、さうするとかえってありがたい親切をしてあげた時、相手から感謝されるのではないかと思いました。

でも、私の過去の経験で気をつけなければいけないと思った事がありました。それは、スポーツタイムに、先に私のぼうしを体育館に持って行った友達がいたのですが、その子は、親切でしてくれた事だと思えますが、何も言わずに持って行ってしまったので、私は、ぼうしがなくなってしまったと思い、心配になって色々な所を探した覚えがあります。その経験をして感じたことは、小さな親切は、人にありがたいと思われないう意味がないという事に気がつきました。

私は、親切とお節かいは、ちがうという事や、本当の親切には、大きさはないう事、親切の大きさは、親切を受けた人がどのくらいうれしかったのかは、人それぞれ感じ方はちがうのではないかという事がわかりました。その様な事から、私は、



銀賞

小さな親切とは、相手にお節かいと取られない、喜ばれる様な親切を自分なりに見つけて困っている人をたくさん助ける事だと思えます。私も日ごろ、学校生活で友達に助けてもらってうれしいと思う事は、私も困っている友達がいたら同じ様に進んで助けてあげたいと思います。

ありがとうってうれしいな

湖西市立東小学校 三年

鈴井 来琉

ぼくには、八十六さいのひいおばあちゃんがいます。ひいおばあちゃんは、ぼくのお母さんのお母さんのお母さんです。ぼくのひいおばあちゃんは、うたうことが大すきで、カラオケの大会にも出ています。いつも元気いっぱい、え顔で話しかけてくれるので、ぼくも自ぜんとえ顔になってしまふ、ふしぎな力を持ったひいおばあちゃんです。

そんないつ見ても元気いっぱいひいおばあちゃんですが、たまに買い物にいっしょにいくと、足こしが弱くなってきたので、歩くのがとてもゆっくりです。少しのだんさでころん

だりしてしまわないかな、ぼくの歩くスピードはやくないかな、とついつい心配になってしまいます。だからぼくは、ひいおばあちゃんといっしょに歩く時は、いつもひいおばあちゃんの手をつないで歩くようにしています。ぼくにつかまっていれば、きつとひいおばあちゃんも安心だろうし、ころんで大けがをしなくてすむと思うからです。それとぼくがひいおばあちゃんと手をつなぐ理由はもう一つあります。それは、ぼくがひいおばあちゃんと手をつなぐこと自体大すきだからです。とつても温かい手で、ぼくまで安心してしまうのです。

買い物中はひいおばあちゃんが、カートをおして、ぼくはひいおばあちゃんが買いたい物をさがしに行くやくわりをします。ぼくがさがしていた物を持つてくると、ひいおばあちゃんはまだ面のえみをうかべて、

「らいくんありがとう」

と、いつてくれるのです。ぼくはそれを言ってもらおうとつうれしくなつて、

「つぎは何をもつてくる？」

と聞きかえます。それを何どかくりかえし、レジにいきます。レジでお金をはらつた後、今どはエコバックに入ったに物を、ぼくがかかえてはこびます。あまりにおもいと、ひいおばあちゃんが心配して手つだつてくれようとするけど、ぼくは、

「だいじょうぶ。」

と大きな声でこたえて、車までに物をはこびます。するとひいおばあちゃんはまた、

「らいくんありがとうね。すぐたすかったよ。」

と、おれいをいってくれるのです。ぼくはえ顔で、

「へっちゃらだよ。また言っただね。」

とかえします。ぼくはただ、ひいおばあちゃんにわらってほしくてやっているのに、

「らいくんはやさしい子だね。親切にしてくれてありがとうね。」

と車の中もおれいを言ってくれました。ぼくは、ひいおばあちゃんにほめてもらって、ちょっとだけお兄さんになれたような気がしました。親切って、人をしあわせにするんだと、ひいおばあちゃんに教えてもらいました。親切ってとっても気持ちがいいですね。ひいおばあちゃん、ありがとう。



銀賞 中学生の部

小さな勇氣

静岡市立安倍川中学校 三年

大谷 紗耶香

これは私が中学三年生の夏休みの出来事です。その日私は隣町で行われているお祭りに友達と一緒にいこうと電車に乗っていました。電車の中はたくさんの人であふれていて、冷房がかかっているのも分らないくらいでした。そこには甚平を着ている一歳にもならないくらいの男の子がベビーカーに乗ってお母さんとみられる女の人と一緒にいました。私は「可愛いな。」と思いながら見ていました。そうして電車に揺られていたら、突然そこにいた男の子が声をあげて泣きだしました。電車の中は一瞬ざわつきました。私は「まあ小さい子だし、すぐ泣きやむだろう。」とそのままでいました。そんな時、電車に乗っていた五十代くらいの男性が「うるさいな。静かにさせろよ。」と言いました。きっと私を含め、その電車に乗っていたほとん

どの人がその男性の一言で不愉快な気持ちになったと思います。その男の子のお母さんも不安そうな顔をしながら謝ることはできずにいました。私は「それは違うんじゃないか。」と男性に言いたいと思って喉からは誰にも聞こえないような小さな声しかでませんでした。そんな時電車に乗っていた二人の高校生らしき男子たちが「いないいないばー。」と声をかけたり、手で自分の顔をつまんだりして男の子の側に近寄ってきました。最初はずっと泣いていた男の子も次第に笑顔になってきました。そしてお母さんはさっきの不安そうな顔など思いだせないくらいの笑顔で「ありがとう。」と言いました。その時、高校生たちは、「たくさん泣いて元気な子になるんだぞ。」と言い笑顔で電車を降りていきました。電車に乗っていたみんながさっきの不愉快な気持ちから、あたたかい気持ちに変わったと思います。その後私も電車を降りて、友達とお祭りを楽しんでいたら、さっきのベビーカーの男の子とすれ違いました。その時の男の子の笑顔は今でも忘れられないくらいにキラキラしていました。あの高校生の行動「小さな親切」がああ小さな男の子の笑顔を守ったんだと思いました。私は「言いたかったけれど怖くて言えなかった。」という後悔が心に少し残りました。その一方で、「次は勇氣をだしてみよう。」と思えました。高校生がお母さんと男の子を助けるために行った親切が、間接的に

私にも勇気をあたえてくれる小さな親切となりました。この出来事をふまえて、私も誰かの笑顔を守れるようなまた誰かに勇気を与えることができるような人になりたいと思いました。

想いをつなく

静岡大学教育学部附属島田中学校 一年

久保田 新菜

私が六年生の時、国際交流のため、数年に一度開かれていた中国の小学生との交流会が実施されることになった。その時の率直な気持ちは、ただただ不安だった。まず言葉が伝わらない。その状況でどうやって交流をすればいいのだろう。私達は意見を出し合い様々な工夫をして当日を迎えた。

中間づくりゲームでは、私達が率先して声をかけ中国の子をグループの元へ導いた。自分達の町を紹介する時は、写真やイラストと少しの英語で伝えた。中国の子も楽しんでくれているようで、少し安心した。皆で知恵を絞り計画を立てた甲斐があったなと思った。

しかし、問題は給食だった。ここに関してはノープランだっ

た。何も決められていない中でのコミュニケーションは難しく、出来るだけの英語で伝えるしかなかった。「いただきます」の意味を何度も言葉で伝えようとするけれどうまく伝わらない。「感謝して頂く」という日本人の大切な想いを伝えたいの。すると、中国の子が静かに手を合わせ目を閉じ「イタダキマス」と片言の日本語で言った。伝わった。言葉では正確に伝えられなかったけれど、その丁寧な「いただきます」を見て、私達の想いを受け取ってくれたと思った。理解しようとしてくれたことが何よりも嬉しかった。すると、その子が笑顔でお土産のクッキーをくれた。「謝謝」は知っていたけれど、私はあえて「ありがとう」と笑顔で言った。言葉は通じなくても、想いは伝わると思ったからだ。その子も、笑顔でうなずいてくれた。

お別れ会の時間になった。私は彼女の荷物を持ち、一緒に会場へ向かった。その子は私に笑顔で「謝謝」と言った。私も笑顔で返した。こんな小さなことが今の私にできる精一杯の思いやりだけれど、その気持ちと、行動に移す勇気さえ持てればそれでいいと思った。別れ際、その子が私の手を握り、「WE ARE FRIEND」と言ってくれた。心がじんわりと、温まってくのがわかった。

私達人間は、話す言葉も、肌の色も違うけれど、心は世界共通なんだ。私は親切にしなければいけないと思って行動したわ



銀賞

けではない。でもその子にとっては私の行動は感謝の気持ちや笑顔に繋がるものだった。そして彼女の笑顔が私の笑顔に繋がり、次の優しさに繋がった。こうやって相手を思う気持ちはどんどん繋がって大きな輪になっていく。

受験をして、私は数多くの学校から生徒が集まる中学校に入學した。私は、中国の友達との交流会で学んだ親切の輪を、自ら広げていこう、名前も、住んでいる場所も、好きな食べ物も、何もわからないけれど、きつとこの想いは伝わるはずだ、そう入學式で誓った。

いつか、この世界が思いやりと笑顔の輪で包まれたらいいな。話す言葉も、肌の色も、国境も越えて。

小さくてとても大きな親切

静岡市立安東中学校 一年

宮本 花凜

私は小学校四年生の時、ひじの骨折で手術を受けた。手術といっても技釘手術で、二泊三日と少なかった。しかし、私はこの三日間でたくさんのお話を学んだ。

一泊目の夜のことだった。手術も二回目だ四年生だったといふこともあり、手術前日の一泊目は一人で泊まることになっていた。しかし、一人で祖父母の家にも泊まれなかった私には、時間がたつのがとても長く感じられた。とうとう私は一人で泣いていた。次の日の手術とねむれないという不安に負けてしまったのだ。それに気づいた同室の付きそいの方が看護師さんに伝えて下さり、しばらくナースステーションに居ることになった。ナースステーションに行くと、どの看護師さんも優しく接して下さり、お仕事も大変なのにたくさん声をかけて下さった。ナースステーションの奥でねむってみることにした私のそばに、看護師さんはずっとついていて下さった。「学校は楽しい?」「何人兄弟?」と、優しく元気づけてくれるような看護師さんの声は私の不安な気持ちを全てとりのぞいてくれた。看護師さんのおかげで、次の日の手術も安心して受けることができた。

この経験から私は大人になるまでの二つの目標ができた。一つ目は、いそがしいときも自分自身のことではもちろん、周りの人にも優しく丁寧に接することができる大人になることだ。私が不安になって泣いているとき、看護師さんは自分の仕事も大変なのに私にとっても優しく対応して下さいました。私も、自分の仕事もきちんとこなし、それに加えて周りの人に優しく対応が

できるような大人になろうと感じた。二つ目は、自分の一言で相手を安心させることができる大人になることだ。看護師さんの一言一言で私はどんどん安心していった。私も、相手に優しく語りかけることで相手を安心させることのできるような大人になろうと思った。

私はまだ自分自身のことではいいっぱいだし、周りの人に優しく対応することもなかなかできない。相手に優しく語りかけることも苦手なため、自分の言葉で相手を安心させることも難しい。でも、まずは家族から。そして友達、周りの人へと少しずつ広げていきたいと思う。そして大人になるまでにこの二つの目標を達成し、あの日の看護師さんのようなすてきな大人になりたい。

あの夜の看護師さんの、小さくて、とても大きな親切は、私にとってもたくさんのお話を教えてくれた。

